

## 地名「三陸リアス海岸」に関する地理学的、社会学的問題

### 一地名「三陸」をめぐる社会科教育論(第3報)一

米地文夫\*・今泉芳邦\*・三浦修\*

(1997年6月30日受理)

#### はじめに

本論文は地名「三陸」をめぐる社会科教育論の第3報である。これまで、第1報では地名「三陸地方」の起源に関する問題(米地・今泉, 1994)、第2報では地名「三陸海岸」の変遷に関する問題(米地・今泉, 1995)を論じた。

地名「三陸」の由来を次のように解明した。すなわち三陸は、明治初年の陸奥国の5分割により生まれた3つの「陸」の付く国の総称であったものが<sup>1)</sup>、1896(明治29)年のいわゆる明治三陸大津波以降、その激甚災害地である北上山地東海岸地域に限定された名となったことを指摘した<sup>2)</sup>。この広狭2つの用例の外に、第三の用例として岩手県の雅称ないし別称として地名「三陸」が用いられた例もその後見出した<sup>3)</sup>。

かつて津波と関連して用いられたため、地域的に限定された地名「三陸」は北上山地東海岸の自然地理的な性格と深い関係をもつこととなった。津波災害の激しい理由としてリアス海岸が指摘された。そのことから「三陸海岸」イコール「リアス海岸」と誤解されがちである。最近の例をあげると、いわゆる三大紙の一つである某新聞の1996年3月3日号には「岩手県野田村は(中略)三陸のリアス式海岸と北上山系に連なる低山にはさまれ・・・」という文で始まる記事が載っているが、野田村付近の海岸は三陸海岸ではあるがリアス海岸ではないのである。

志賀重昂(1894)の『日本風景論』は、日本人の風景観を変えたといわれているが、同書の「三陸」海岸の記述にはリアス海岸の名はない。『日本風景論』刊行2年後の1896年の明治三陸大津波でこの海岸が広く知られたが、その美しい海岸の風景やリアス海岸の景観について知られるようになるのは、はるかに遅れる。明治末期から昭和の戦前期までは、むしろ、津波や漁港に関わった地形としてリアスの名が徐々に知られていったのである。

第二次世界大戦後、三陸のリアス海岸は陸中海岸国立公園の主部となり、観光地として世に知られるようになり、それとともに地形景観から命名された「三陸リアス海岸」の名が地名としても用いられるようになった。しかし、それは地名が一人歩きして、三陸海岸全域がリアス海岸であるとか、沈降海岸の典型であるという誤解をも招くことになった。本稿は、この地名「三陸海岸」と地形景観「リアス海岸」との関係とその合成による地名「三陸リアス海岸」につ

\* 岩手大学教育学部

いて多面的に考察し、社会科教育上の問題点を指摘したものである。

## I 「三陸リアス海岸」と自然地理

### 1 術語「リアス」と「リアス海岸」の導入と普及

明治初年の陸奥国の5分割によってできた3つの陸の付く国の総称であった地名「三陸」が、1896(明治29)年のいわゆる明治三陸大津波以降、その激甚災害地である北上山地東海岸地域に限定された地名となったことはすでに指摘した(米地・今泉, 1994, 1995)。つまりこの過程は、複数地域名称の全域カバー型(例えば両羽に対する三陸)名称から局地連結型(例えば奥羽山脈に対する三陸海岸)名称への変換を意味している。さらにこの間に、三陸海岸の特異な地形景観として「三陸リアス海岸」が広く知られるようになる。

1901(明治34)年の『帝国物産誌』(井原儀編)には、「北東地方ハ屈曲出入甚シク牡鹿、松島両灣ノ外ハ、狭小ナル港灣ヲ有スルノミナレドモ」とあり、三陸海岸の屈曲した景観が指摘されている。田山花袋は、1911(明治44)年発行の『新撰名勝地誌東山道東北部』の中で、「交通の便なきが為め全く旅行家より閑却せられたるは、三陸(陸前、陸中、陸奥)の海岸なり。されどこの海岸記すべきことなきにあらざらず、風景またすぐれたる處多し」とその風景美を記し、「明治二十九年三陸の海嘯」などにも言及している。これらには、リアスやリアス海岸などの地形術語はみられない。しかし、これらが書かれた1900年代の初めには、すでに研究教育の場に「リアス」や「リアス海岸」が導入されていたのである。

実は、リアスの語が日本において用いられたのはかなり古く、Richthofen(1886)がこの術語を提示してからあまり年月をおかずに導入されたものと考えられる。屈曲の著しい海岸地形や海岸景観がリアス海岸であるとの認識は、初め氷食谷の沈水したフィヨルド海岸に擬せられて論じられた。

志賀重昂(1894)は『日本風景論』に、A. Miallの英詩を引用し、その中で長崎の景色をフィヨルドにも並ぶものとしたことを受けて、九州の西海岸を「格好たる諾威(ノルウェー)のフキヨルド」と書いている。また、当時の地学界の権威であった神保小虎(1896)は『新編地文教科書』のフィヨルド(神保は「ふよるど」と記している)に関する記述の中で、三陸南部をノルウェーのフィヨルドと対比させて、「陸前ノ東南金華山ノ地方ニ斯ノ如キ地勢ノ海岸アレドモ似テ非ナリ」と書いた。さらに、1905(明治38)年の地学雑誌204号で、佐藤伝蔵は次のように述べている。

不規則にして出入多き海岸に就ては峡湾(フィヨルド、筆者ら注)海岸及びリアス海岸の名あり。リアスとは又リヒトホーフエンが命名したるものにして、例へば西班牙の西北海岸の如く、その犬牙出入に富むは峡湾海岸と異ならざるも、たゞ其の平坦なるの差あり。

このように、術語「リアス」の導入当初は、リアスが第四紀更新世の氷河時代の氷食谷が沈水したフィヨルドと類似の地形景観であることが注目された。この3例のほかにも、日本の沈水海岸がフィヨルドに似ているということは、しばしば言われたらしく、三陸南部をノルウェーのフィヨルドに見立てることは後々まで続く。

1928(昭和3)年岩手県発行の『岩手県案内』には、「海岸の北半は単調なる砂濱峭岸相半す

るに過ぎざれども南半は屈曲極めて多く所謂フヨルト（フィヨルド，筆者ら注）的港湾に富み…（後略）」とある。最も新しいものには，第二次世界大戦後の国立公園指定の経過がある。毎日新聞社が1950（昭和25）年に応募による観光地の人気投票「新日本観光地百選」を行った。当時八幡平と三陸海岸の国立公園指定を受けようと運動中だった岩手県は，その援護射撃として観光地百選が有効と判断し，その当選のために，いわゆる官民一体の運動を行った。それまで知名度の低かった三陸海岸を広く知ってもらうには，新しい魅力的なネーミングが必要ということになり，県職員のアイデアで「三陸フィヨルド」の名を用い，海岸の部において第2位入選という成果をあげた。しかしすでに，リアス海岸や三陸リアス海岸が広く使用された当時，この命名は学術的には誤りであるという研究者からの厳しい指弾もあった。そのため，この名はその後用いられていない。

リアス海岸形成の主要因である山地の沈降に関して記述した例もみられる。例えば，脇水鉄五郎（1939）の『日本風景誌』の陥没海岸（沈降海岸，筆者ら注）に関する記述に，「太平洋にも北上山地の東海岸，志摩半島，紀伊水道，豊後水道の両岸等には同種の地形がある」とあり，リアス海岸が屈曲に富んだ海岸であるという地形景観だけでなく，陸地の沈降によってできたことも広く知られていたことが分かる。

ついで，三陸海岸のリアスに関する記述をみよう。1908（明治41）年の地学雑誌238号には，第22回文部省教員検定試験地理科予備試験問題の一題「地形上より見たる港の種類を問ふ」の擬答の一項として「海岸の出入鋸歯の如く三角形の深湾内地に浸入せる Rias に生せるもの，例，釜石，長崎等」とあり，釜石が例示されている。また，岩手県の出版物にも，1908（明治41）年刊行の『巖手県誌』に，「海岸は，直に急傾斜をなせる丘陵をなし，幾多の灣澳を生じ，中部以南特に多し。是等灣澳は，概ね狭長にして，岸高く水深く，所謂リアス式に属す」とある。

地理教育に関連したものとしては，1911（大正元）年の『改訂大日本地理集成 全』には，「仙台湾著名なる松島群嶼の風光を賞し，牡鹿半島を廻れば地貌少しく其の相を異にし，所謂リアス式海岸を為し，数多の岬岨鋸歯の如く駢出するは北上山脈の山脚の為めなり」とある。このほか同書には，志摩およびその付近もリアス式海岸を為すとの記述もある。その当時，地理教育の場において，三陸海岸がリアス海岸であることは重要であったが，「三陸海岸」や「三陸リアス海岸」の名はまだ定着していないのである。

ところで，リアス海岸とリアス式海岸のいずれを書くべきかという点については，研究者により見解が異なる。リアス式海岸と書くのは誤りでリア式海岸というべきであるという意見もある。また古くはリヤス（式）海岸とも書かれており，標記は様々であった。「・・式」という表記はどちらかといえば古風であり，筆者らは「リアス海岸」が無難であると考えている。中国では里亜斯型海岸と書く（『地理学詞典』，1983）が，もし「式」に類する語をつけるならば「型」を用いるのも一つの方法で，リア型海岸という表記も考えられるが，それらを用いることはさらに用語の混乱を招くであろう。

## 2 三陸リアス海岸の自然地理的範囲

この問題は，地名「三陸海岸」がどのような地理的範囲を指すかにも関わる。なぜなら，三陸リアス海岸は「三陸海岸」の一部であり，三陸海岸は「三陸」の海岸の一部でもあるからである。それはまた，北上山地の地形にも関わる問題である。三陸海岸の範囲については大別し

て次の3つの見方がある。

- A：八戸市鮫角から金華山まで
- B：八戸市鮫角から石巻まで
- C：下北半島尻屋崎から阿武隈川河口まで

Aの考え方は、外洋に面した北上山地東海岸をいうもので、三陸津波の被害地域であり、かつ日本海溝に沿う点で、この範囲を採る考えが成り立つ。

Bの考え方(筆者ら)は、北上山地が太平洋に臨む海岸を指すもので、海岸の地形の質的な共通性に着目した点に、この範囲を採る視点がある。人文地理的にも、牡鹿半島の西部の海岸を含める根拠がある。例えば米地・遠藤(1988)は、牡鹿半島の西海岸の漁村の組分けと地形との関係を論じたが、その海岸は三陸海岸南部に共通する特徴的なフラクタル的地形を持ち、その地形に支配された漁村の組分けもフラクタル幾何学によって説明できることを論じた。

この両者は、牡鹿半島西海岸を含むか否かの違いであり、前者は太平洋との位置関係に、後者は海岸の地形に、それぞれ依拠した見方である。前者を採れば、仙台湾岸の海岸とは金華山で接することになり、位置関係は明白である。後者を採れば、石巻以南の砂質海岸と以北の岩石海岸を画することになり、地形的な等質性によって区分されることになる。この2つの考え方は場合に応じて使い分けられているといつてもよいが、どちらかといえば常識的、一般的には前者、学術的には後者が用いられることが多い。

ときには、Cを採る場合もある。武藤(1985)は、「三陸沿岸域および三陸沖については、従来その範囲は漠然としており」と書きながらも、「地理上の三陸には、尻屋崎から仙台湾に面する沿岸が含まれている」と述べている。気象学や気候学分野の三陸沖がこの範囲の例である。

これらのほかにも、尻屋崎から石巻湾まで(貝塚, 1985)や、尻屋崎から牡鹿半島南端まで(阿部, 1984)をそれぞれ三陸海岸であるとする例もみられる。

筆者らは、あらためて「三陸海岸」の範囲を、八戸市鮫角から石巻万石浦までの、北上山地が太平洋と接する部分を指す」と定義しておきたい。

前述したように、リアスやリアス海岸の導入や三陸の海岸がリアス海岸であるとの認識は早いにもかかわらず、「三陸リアス海岸」という用語が地名として認知、定着するには、かなりの年月が必要であった。第二次世界大戦後ようやく実際に多用され、あるイメージを人々に与えるようになってきたことは確かである。

次に八戸鮫角から石巻万石浦までの三陸海岸のうちで、どの範囲が地形学的にみてリアス海岸であるかについて、これまでの理解のされかたを検討しよう。

山口(1959)はリアス海岸について次のように述べている。

三陸の名がこの海岸地方の総括名として使われたのは、おそらく八戸鮫崎浜通(中略)とくに久慈以南牡鹿半島にいたる海岸地方が、長大にわたりながらも類似のリアス式海岸線によって構成されているため、地域区分的な考え方のうえで、これを一括した地域名の必要が痛感されたためであろう。

引用文中の浜通は藩政時代の白浜、神子沢、種差、大久喜、金浜あたりの汎称である。この

記述はリアス海岸の範囲を間違えて捉えている。つまり、久慈以南に限っても宮古湾北部までの非リアス部分を含んでしまうのである。この宮古を境として南部と北部の海岸景観の相違を明確かつ詳細に指摘した用例（横田，1950）には、次のような記述がある。

この海岸は宮古市を境として北と南では著しく違った特徴をもっている。北は断層崖が海に迫り怒濤が岸を噛むという断層海岸であり半島も島も良港湾もない。しかし北方は海岸段丘が行儀よく重なりあい、海に急傾斜している。（中略）宮古市以南は見事なリアス式海岸で突出十余にも及ぶ半島が並列して良港湾を抱いている。

北部の段丘崖（海食崖）を断層崖とする誤りはあるが、範囲の記述は正確である。川本（1960）の岩手県の海岸についての記述「南部の海岸は三陸リアスと呼ばれる沈降海岸で」では、範囲を明示していない。

このような地理研究者の認識とは別に、三陸リアス海岸の範囲は一般にどのように認識されているのであろうか。岩手大学教育学部の学生 82 名に、海岸線の屈曲を滑らかにした白地図を与えて、図上で「三陸リアス海岸」の範囲を示させた。その結果、幾つかのことが明らかになった。

まず、正解というべきものが少ないことで、地元出身の学生が多い（岩手県出身 56 名）にもかかわらず、適切な回答をしたものが僅か 6 名に過ぎなかった。これは、地理教育において地元の身近な事象について学習することがほとんどないこと、リアスという自然地理的事象を厳密に吟味して理解する機会が少ないこと、海岸線の屈曲をなくした白地図に本来の地形が示される地図を想起して重ね合わせることが難しいこと、などの理由もあろう。

誤答の多くは南限を実際よりも北にしたもので、61 名であった。その大半（51 名）は大船渡・気仙沼付近すなわち岩手・宮城県境付近とした。次に多い誤答は北へはみ出したものである。北へのはみ出し 42 名のうち、青森県までのものは 10 名に過ぎず、多くは岩手県北部のみを含めたものである。なお前のケースの 61 名と後の 42 名とは重複しているもの（29 名）が多い。この岩手県北部へのはみ出しは岩手県出身者の比率が高く（岩手県出身者では 75%、他県出身者では 47%）、三陸リアス海岸を自分の県の中だけのものと考えがちなのかも知れない。

このように、北限も南限も北にずれて、全体として学生のメンタルマップの中の三陸リアス海岸は、実際よりも北に位置している。

岩手県における、このような傾向について、阿部（1984）は次のように記す。

三陸という言葉に岩手県沿岸、つまり陸中海岸のイメージが強いのはなぜだろう。私たち岩手県人が日常、何気なく使っている三陸の言葉に岩手県沿岸あるいは陸中海岸という固定観念があるからだろうか。

「確かにそれもあるが」と続けて、県外の観光客にも同様の人が多く、「陸中海岸国立公園」という景勝地があるからであるとしている。この指摘した事実はそのとおりであろうが、筆者らはその解釈とはやや違う捉え方をしている。すなわち「陸中海岸国立公園」という景勝地があるからではなく、景勝地が岩手県内のみにあるような、言い換えればリアス海岸が岩手県内のみにあるような、「陸中海岸国立公園」という名称が国立公園に付けられたためなのである。

加えて、学生が三陸リアス海岸を、山田線の一部を含んで三陸鉄道の南北リアス線の路線にほぼ重なり合うものと見ていることには、この路線名が効いているに違いない。

陸中海岸国立公園の北部の非リアス海岸には、北から黒崎、北山崎、田老海岸などの観光スポットがあり、海食崖と隆起海岸段丘群の豪壮雄大な風景が展開している。高い海岸段丘ほど広く、北部ほど同じ段丘が高くなり、100m以上の段丘が直接太平洋に臨んでいる(米倉, 1966; 三浦, 1968)。しかし、このような実際の地形に合わない名称の北リアス線は、リアス海岸に沿って走っているという誤解を広めるのである。例えば、三陸縦貫鉄道の開通を伝える1984(昭和59)年4月2日の朝日新聞には、ヘリコプターから撮影した写真が載り、「リアス海岸を走る三陸鉄道の一列車(中略)野田玉川駅付近で」と付記される(同社飯島通明氏のご教示による)。

### 3. リアス海岸の地形

1) リアスとフィヨルド リアスやリアス海岸の導入当初から後々までその地形景観がフィヨルドに見立てられたことや、三陸リアス海岸が広く認識されたのが1950年代であったことは前述した。実はリアスがフィヨルドと類似の地形であることは、しばしば言われたことなのである。例えば、『地理学事典』の式(1973)の記述には、「フィヨルドは沈水している点ではリアス海岸に似ているが、・・・」とある。Fairbridge(1968, a, b)は、「フィヨルド海岸はリアス海岸に類似するが、同じ沈水谷であってもリアス海岸には樹枝状の支谷があり、フィヨルド海岸には切断山脚部や懸谷のある点が異なる」と記している。さらに同じ筆者は、フィヨルドと同様氷食によってできたフェルズについて、「フィヨルドの狭長な湾(溺れ谷)に対しフェルズの湾はロート状に開き、より不規則な形態であることが、リアスと混同される理由である」と記している。つまりフェルズは相対的に低起伏の地域が広範囲に沈水したもので、フィヨルドの懸谷状の支谷までも湾となったものである。

先に引用した佐藤(1905)の「不規則にして出入多き海岸に就ては峽湾海岸及びリアス海岸の名あり。中略。その犬牙出入に富むは峽湾海岸と異ならざるも、たゞ其の平坦なるの差あり」の記述中、「平坦なるの差」の内容がフィヨルドとの比較ではわからない。もし佐藤がこのフェルズに関する「何か」を読んだとすればそれが理解できるのである。つまり、フェルズの海岸はフィヨルド海岸やリアス海岸より低起伏であることを指していると考えられる。

このように、リアス海岸とフィヨルド海岸の類似性を記述することは、当初から今に至るまで研究者の間でも行われていたのである。したがって、我が国へ術語リアスやリアス海岸を導入した研究者のフィヨルドへの「見立て」が見当違いだったとは言えないのである。

2) 隆起海岸と沈降海岸、沈水海岸 一般には宮古を境に、北は隆起海岸、南は沈降海岸、したがってリアス海岸とされているが、細部を検討してみると必ずしも妥当な表現ではない。Richthofen(1886)はもともと山地を開析した樹枝状の谷系が溺れたものをリアスとしたが、後に、Davis(1915)やJohnson(1919)などは、リアス海岸をフィヨルドやダルマチアン海岸さらにはエスチュアリーなど浸食谷の沈水した海岸にまで拡大適用した(Fairbridge, 1968b)。しかし、多くの研究者はRichthofenのオリジナルな定義を採用した。それは、開析された山地周辺の河川浸食によってつくられた樹枝状河谷の沈水であり、三陸海岸の多くの湾のような海に開いたロート状の湾入形態であった。

リアス海岸の重要な問題として沈降過程や形成時代があり、近年までこれに関する議論が続

いた。それは、リアス海岸が地盤の沈降による沈降海岸か、海面上昇（いわゆる氷河性海面変動）によるものも含むより広義の沈水海岸かということである。この議論では、形成時代（河谷の溺れた時期）が後氷期の海面上昇期か、あるいはより古い時代なのかが焦点になった。前者の説では沖積世に汎世界的にしかも広範囲にリアス海岸が形成されたことになる。我が国での例では、大塚（1931）や星野（1964）は前者の考え方に立って論じたのに対して、吉川（1964）はリアス海岸の形成期がさらに古い時代にさかのぼるとした。後に星野（1968）も後者の考え方でリアス海岸の形成過程を論じた。リアス発祥の地スペインの北西ガリシアのリアス海岸でも隆起の証拠である海岸段丘が分布している（Mensching, 1961）。これらの論争を踏まえて、三浦（1966, 1968）は三陸リアス海岸の形成が、湾内（リアス）に分布する海岸段丘の形成前と形成後の2つの段階に分け、前者をリアス海岸の原形形成の時代、後者をリアス海岸の細分化ないし細部修飾の時代とすべきであると主張した。しかも後者の時代の主役は氷河性海面変動なのである。この考え方では、前述した Richthofen の定義による三陸リアスの形成時代、つまり北上山地東部の開析谷の沈水は、後氷期よりはるかに古い第四紀の中期以前になる。しかし、Richthofen 後の研究者によるリアスの拡大適用は、広い地域で、しかも種々の地形地域で、後氷期海進やそれ以前の間氷期海進によるリアス海岸の形成を論じることにつながったと考えられる。

日本のリアス海岸の典型例として、三陸リアス海岸ほどではないにしてもしばしば登場し、真珠養殖の英真湾を擁する志摩半島のいわゆるリアス海岸は、山地の開析谷ではなく第四紀後半の氷河性海面変動が優勢な時代に形成された台地（隆起海岸段丘）の開析谷が溺れたものである。いわば、三陸リアスの細分化や修飾の時期に相当する時代であり、海面変動が主役を演じた時代である。したがって Richthofen の定義のリアスに当たらない。

このように、山地の開析谷が溺れたものという Richthofen の原義からも、三陸リアス海岸はまさにリアス海岸の典型例であり、志摩半島のリアス海岸、若狭湾のリアス海岸、九州西海岸のリアス海岸などのような事例とは異なり、自然地形地名、固有名詞としての「三陸リアス海岸」が広範に認知されたのだとも言えよう。

## II 「三陸リアス海岸」の社会学的・人文地理学的考察

### 1 交通・運輸

リアス海岸は良港に恵まれている点で海上交通上重要であるとみなされていたが、同時にアクセスする陸上交通路の不備も指摘されていた。例えば、1936（昭和11）年発行の『地理学小辞典』には、「リアス式海岸」とともに「リアス港」という項目があり、次のような説明が付されている。

地形的位置を標準として分類した港の一種で、リアス式海岸の入江に発達したものをいふ。一般に水が深くて自然の良港をなす場合が多いが、背後に直ちに山地が迫るために普通背後の陸上の交通が不便である。釜石・宮古等は此代表である。

この中で、リアス式海岸には Rias coast と英語表記が付いているが、リアス港には付いていないのは、日本製の用語のためである。釜石と宮古はリアス港の典型ととらえられ、この「天

然の良港」論が地理学の重要なテーマの一つであった。

ところで、いわゆる三陸縦貫鉄道の構想は、1890（明治23）年頃すでに鉄道建設運動があったともいうが、一般には1896（明治29）年の明治三陸大津波の直後から各地に起こったといわれている。災害直後の救援や復旧活動に際して、交通の便の悪いことが極めて大きな障害となったことから、鉄道の必要性が痛感されたという。もちろん道路の整備も必要であったが、自動車の多い現代とは異なり、鉄道の新設にける期待は特別のものであったのである。

1908（明治41）年、「三陸縦貫鉄道」建設の請願が帝国議会で採択された。1922（大正11）年には鉄道建設法別表に予定線として編入され、1929（昭和4）年には帝国議会で予算が計上され、久慈から普代までの建設が計画されたが、浜口内閣の緊縮政策のため実現しなかった。ようやく1962（昭和37）年建設線に編入され、1965（昭和40）年着工する。

1984（昭和59）年4月1日、全国初の第三セクターによる「三陸鉄道」が開業した。普代一宮古間、釜石一吉浜間の新線部分の開通により「三陸縦貫鉄道」はできたが、北から八戸線、三陸鉄道北リアス線、山田線、三陸鉄道南リアス線、大船渡線、気仙沼線と、実に6つの線区に分かれ、南には別に石巻線があるという複雑さである。山田線を挟み北リアス線と南リアス線を結んで久慈と盛との間の列車はあるものの、運行本数も少ない。また北の八戸線や南の大船渡、気仙沼両線などへの乗り入れがないなど、縦貫鉄道の名にはほど遠い。最近（1997年7～8月）、ようやく臨時列車リアス・シーライナーを仙台—久慈間に運行するなどの動きがみられる。

## 2 漁村社会と漁港

三陸リアス海岸の海岸線の屈曲には、フラクタル構造、つまり一種の入れ子構造がみられる。その入れ子構造が漁村の社会的構造にも関わることは、江戸時代の牡鹿半島西岸の事例から明らかにされた（米地、1987；米地・遠藤、1988）。今泉ら（1995）は社会と自然の関係をとらえる例として三陸海岸のフラクタル構造と地域社会との関連を示唆した。

今泉（1984）が社会学的な分析に用いた1890（明治23）年の『岩手県統計書』の漁業統計の漁場についてみると、漁場に関する地域のサイズが大きい方から順に、湾レベル、浦レベル、漁場（ぎよば）レベルと少なくとも3つのレベルに識別できる。

例えば釜石湾は、釜石浦、平田浦、両石浦、箱崎浦、鶴住居浦、片岸浦の6浦に分けられ、それぞれの浦は1～11の漁場からなり、平均は5漁場である。釜石浦を例にとれば、大渡川、鎌崎、小縄崎、小路の4漁場からなる。両石浦は、平磯、松島、小野木ヶ浜の3漁場からなる。

湾は近代の地理的概念であり、湾レベルの社会的まとまりはほとんど意識されていなかったといえる。例えば、釜石市と大槌町の境界は大槌湾の中に、大槌町と山田町の境界は船越湾の中に、それぞれ引かれている。それに対して浦レベルは歴史的な基本的単位といえる。形態的にはいわば小湾であるが、それが1つの村に対応する。つまり浦は村であり、漁村は漁浦とも称された。

小湾は浦、つまり村の立地する位置となっている。三陸リアス海岸では、おおむね大きな湾には3つ以上の浦があり、それ以外の中～小湾には1つないし2つの浦がある。船越湾から広田湾までの区間では次のようになる。それぞれに大中小の目安を付した。



	湾の規模	浦の数
船越湾	中	2
大槌湾	大	4
両石湾・釜石湾	大	3
唐丹湾	中	1
吉浜湾	中	1
越喜来湾	中	1
綾里湾	小	1
大船渡湾	大	3
大野湾	小	1
広田湾	大	4

つまり大きな4つの湾には、14の浦が、6つの中～小規模の湾には、7つの浦がある。ただし釜石湾と両石湾を分けると大きな湾は3、浦が11、中～小規模の湾は8、浦が10となる。釜石湾と両石湾の扱いの違う二通りの数値を平均して用いることにする。

コッホ曲線を海岸線に見立てると、中央の大きな湾に3つ、両側の中～小湾に1つずつの2つの浦が立地することになる。このモデルを4(大湾の数)倍して、前記の船越湾～広田湾の範囲と比較してみよう。

	大きな湾	その中の浦	中～小規模の湾	その中の浦	浦計
コッホ曲線×4	4	12	8	8	20
実際の海岸	3.5	12.5	7	8.5	21

このようにコッホ曲線を海岸線のモデルとすると、実際の浦の配置はよく似たものになることがわかる。つまり、リアス海岸線の入れ子的性格に対応する形で漁業集落が立地していたのである。

一方、浦と漁場との関係は、地域によって違いがある。同じリアス海岸であっても、気仙郡の海岸は、旧伊達領で、旧南部領海岸とは異なり、1村1漁場である。1村がほぼ200戸程度の村からなる。これは牡鹿半島西岸の場合もほぼ同じで、湾の小さなこの地域では1つの湾におおむね3つの村があった。

また、非リアス海岸である岩手県の北半部においては、やはり1村1漁場であるが、これは漁業のための条件がリアス海岸地域よりも劣るためであるらしい。

これらのことから、明治期までの三陸リアス海岸では地形に関わった漁村社会の状況は次のようにいえる。

- ①湾レベルは社会的な単位となっていない。
- ②浦レベルは漁村社会の基本的単位として生活と生産の双方の基礎的集団を作っていた。
- ③漁場レベルは生産のための単位である。しかし、浦レベルがそのまま漁場レベルとなる所もあり、地形との対応は不鮮明で、浦レベルと漁場レベルの関係は複雑である。

三陸海岸における漁村社会の主産業である漁業は、大正期から漁船の動力化、大型化や漁法の近代化などが進み始め、それまでの地先漁業、沿岸漁業から沖合漁業や遠洋漁業に移行した。その間に、湾レベルとりわけ大型の湾における近代的漁港を中心とした地域的なまとまりへと、地域社会が変容した。この変化には、山田線、釜石線、大船渡線などの鉄道や、内陸と海岸とを結ぶ北上山地の横断交通路が整備されてきたことも関わっている。この変化の様相も三陸海岸の北部、中部、南部では異なった。

非リアス海岸である北部では、ホッキ貝やワカメなどの磯漁が、近代的漁業の時期になってほぼ継続していた。もちろん沿岸漁場では定置網による漁業も行われてはいたが、比重は小さかった。したがって漁港は発達しなかった。

大型の湾のある中部のリアス海岸では、明治期までは沿岸の定置網漁業が特に盛んであった。大型の湾の中の小さな湾入のそれぞれに漁業集落があり、それらが社会的な単位となり、大型の湾レベルは社会的単位となっていなかった。大正期から昭和初期までの間に無動力船から動力船への転換が進み、漁船漁業時代への移行が始まった。この間に漁業は、マグロやサケを捕る沿岸の定置網漁業から、カツオやイカを捕る沖合の漁船漁業へと発展した。三陸漁場という呼び名は、この沖合ないし近海の漁場につけられた比較的新しい名称である。大型の湾の奥には宮古、山田、大槌、釜石などに漁港が発達し、そこを中心とした、より広い社会的なまとまりとなっていった。しかしそれはかならずしも大型の湾全体が一つの単位となったわけではなかった。

一方、比較的小型の湾が並ぶ南部のリアス地域では、磯漁が盛んで、定置網漁業もかなり発達していた。そのため小型の湾ごとにそれぞれが一つの漁業組合を作るなど社会的な単位となっていた。この地域では、漁船漁業時代への移行に伴って、その中の幾つかの湾には漁港が発達することになる。大船渡や広田がその例である。この地域は結局、小型の湾ごとに形成された社会的なまとまりが、その後も持続することになった。

### 3 観光資源

三陸海岸の漁業は近年不振である。鉄道や道路による縦断的交通路の整備が進みつつある三陸リアス海岸では、上述のような湾・浦・漁場レベルなど生活や生産と地形的特性との関わりはしだいに弱まってきている。かわって、観光地として知名度が高まり、この側面での今後の発展が期待されている。

現在、観光地と関わって論議されている問題の一つは、国立公園名称の改名の是非である。もともと岩手県では1949(昭和24)年に「三陸海岸県立公園」の指定を行い、さらに「国立公園候補地三陸海岸」として指定運動をしていた。その海岸のうち、浄土ヶ浜などを中心とした中央部の海岸に対して、1954(昭和29)年「陸中海岸国立公園」という呼称が付せられて選定され、翌1955(昭和30)年正式に指定されたのであった<sup>4)</sup>。この時の指定は普代村松磯から釜石市大根崎までで、たしかに陸中の部分のみであった。

1974(昭和39)年および1981(昭和46)年に隣接区域が追加指定され、北は久慈北方まで延び、南は岩手県大船渡や宮城県気仙沼などの「陸前」地域にまで広がった。これら南の地域からは公園の名称を三陸海岸国立公園にという声が生じだいに高まり、特に1992(平成4)年の「三陸・海の博覧会」の成功を機にその運動が盛んになってきた。一方、これまでの陸中海岸国立公園としての実績や知名度から、現在の名称を維持しようとする主に宮古付近の地域の意見も

強硬で、対立している。

もともとの「三陸」という地名のあいまいさからいえば、陸中海岸国立公園をわざわざ改名する必要はなく、例えば、磐梯朝日国立公園が月山、飯豊、吾妻などの名が入っていないのと同様、全体を示す名でなくともよいという意見もなり立つ。他方、1989（平成元）年に牡鹿半島などが南三陸金華山国立公園に指定され、これとの整合性や、地域イメージとしての三陸海岸が陸中海岸よりも定着しているなどの意見もなり立つ。

筆者らは、この問題に対して、一方を可とするような判断は留保する。しかし、敢えて第三者的な立場からのコメントを求められるならば、次のように答えたい。

基本的には「三陸海岸国立公園」の名に改称の方がベターである。しかし、一部に強い反対がある状況では、現在の名称を変更するには時間がかかるであろう。将来的には南三陸金華山国立公園を併せ、さらに岩手県の種市付近や、陸奥（青森県）の種差海岸・蕪島などをも包括して名実ともに三陸海岸国立公園とするのが望ましい<sup>5)</sup>。西の瀬戸内海国立公園と並び称されるような大「国立公園」とすべきものと考えられる。この問題自体は、地名と地域との関係、とりわけ地名の地域への諸効果に関する問題を考えるための興味深い事例である。

### Ⅲ 地名「三陸リアス海岸」と社会科教育

#### 1 地名「三陸」と社会科教育論（米地・今泉 1994）補遺

地名「三陸」が地理教育に取り入れられたのが比較的遅いことは前報（米地・今泉 1994）において論じた。その中で第二次世界大戦前は、教科書にも地名「三陸」がほとんど使用されていなかったことを明らかにした。しかし、昭和初期には、この地域においても動力船による沖合漁業が盛んになり、それにとまって三陸漁場という名が俗用されるようになってきたのである。

その後の調査で、筆者らは興味深い例を見いだした。戦前の1938（昭和13）年に発行された『東北読本』という文部省著作発行の副読本に次のような記載があった。

日本海溝は、金華山沖で八九千米の深淵となつてゐるが、この附近は、黒潮と親潮とが行きあふ所で、魚類は極めて多く、古くから世界三大漁場の一と稱せられた三陸沖の大漁場である。

このほか、三陸、三陸沿岸、三陸地方、三陸沖合、など「三陸」が多用され、三陸の範囲を示す次のような記述がある。

三陸の海岸線は、北半は平凡であるが、南半は複雑を極めてゐる。その関係上、漁港の分布にも自ら相違がある。即ち北半には、およそ中央部に八戸、その北に白糠、南に久慈がある程度であるのに対して、南半は天然の良港に富み、宮古・山田・釜石・大船渡・気仙沼・志津川・雄勝・女川・鮎川・荻濱・渡波・石巻・塩竈等があつて、沖合漁業の飛躍に都合のよい足場になっている。

この副読本の「三陸」は、このように尻屋崎から南を指している。このことは「海峡（津軽、筆者ら注）を東に出れば、その東南が三陸沖の大漁場である」という記述もあることからまわ

かる。一方、南は少なくとも塩竈までが三陸に含まれている。

この範囲はI章で挙げた3つの見方のうち、Cにあたり、現在ではあまり用いられていない広い範囲を指す用例に当たる。

『東北読本』は1937(昭和12)年から5カ年間実施された東北振興計画第1期に対応して作成されたものである。地理的な叙述もあるが、歴史や経済、政治および修身的な内容も含まれ、いわば社会科(当時は公的には存在しなかったが)的な読本といえる。したがって、地理教育の観点から著述されたものではなく、政府の開発政策とその推進を青少年に徹底普及し参加させるためのものである。学問的にはまだ市民権の確立していなかった地名「三陸」も、行政的には定着していたので、当然使用されたのである。

## 2 田中啓爾『高等地図』七訂版(1959)の分析

田中啓爾が日本の地理教育の中に占めた役割は大きい。その著『高等地図、七訂版』(日本書院、1959)は、「奥羽」が用いられたおそらく最後のものであること(したがって「東北」が用いられていない)や、「三陸」が多用されていることなど、東北の地名表示に関し、一つの転換期を示すといえる。「三陸」の使用例には次のものがある。

- ①奥羽地方図(150万分の1)の田老から大槌にかけて、陸域に三陸地方の名が記されている。
- ②地形と海洋図(670万分の1)に普代付近から気仙沼付近にかけての海域に三陸海岸と記入されている。
- ③田老から大船渡までの地域が三陸海岸として30万分の1の拡大図となっている。
- ④気候図に、阿武隈川河口以北の東北の太平洋側を奥羽東区(三陸区)としている。

前述したように三陸地方や三陸海岸は、一般的に俗用としてすでに用いられていたが、研究・教育上は依然として広域的地名の空白域であったのである。その空白域に命名する必要が生じたのは、リアス海岸の部分が地理教育上重要と田中が考えたからであり、田老から大船渡までのリアス海岸部分が、三陸海岸として拡大された特図(③の図)となっていることは、それをよく示している。

この地図帳では、九州地方、関東地方などのいわゆる大地域区分とともに、より狭い地域に対して「・・・地方」という固有名詞が用いられているのは、会津地方、渭南地方、祖谷地方、郡内地方など少数である。これら古い伝統的の地方名に田中が、明治以降の新しい三陸地方を加えている。

大地域区分の名称に奥羽といういわば保守的な名称を使用していた田中が、他の地図帳よりも早く三陸を多用したことは、一見矛盾のようにみえる。しかし、奥羽も三陸も旧国名に由来することでは共通の性格ももち、リアス海岸の地理教育上の重要性を表現する必要性があったからであろう。この地図帳は地理教育における地名の用い方の点では、戦後、「三陸海岸」の多用される時代の代表ともいえるものなのである。その意味で、刊行時期の昭和30年代半ばは、地理教育上の一つのエポックなのである。

## 3 地理教育における三陸リアス海岸—自然地名の導入の意義

前節で述べたように、地理教育の場では、地名「三陸海岸」という地名はリアス海岸と関わって多用されていると考えられる。しかし、自然地名の「三陸リアス海岸」が三陸海岸の南半部であること明記する教科書は、増えてはいるが一般的には少ない。つまり、依然として、教科書の記述には、三陸北部の非リアス海岸をもリアス海岸と受け取られるような表現が行われているのである。

例えば、高等学校用教科書には、「この地形の語源となったスペイン北西部や三陸海岸の南部が典型例である」(東京書籍, 1990)や「三陸海岸やエーゲ海沿岸などのリアス式海岸は、山地が半ば海に沈んだ地形で、岬とおぼれ谷の入り江が交互に並んでいる」(帝国書院, 1994)などと記述されている。中学校用教科書にも、「東北地方のリアス式の三陸海岸や北海道の海岸は、豪壮な海岸美で知られる」(東京書籍, 1993)とある。三陸海岸はリアス海岸の典型例、つまりまさに教科書的なサンプルに過ぎないのである。また、これらの記述により、三陸海岸イコールリアス海岸であるという理解が導かれることは明瞭である。

この誤解を避ける方法の一つは、「三陸海岸のうち南半部は三陸リアス海岸と呼ばれ」などのように、固有名詞「三陸海岸」の一部に固有名詞「三陸リアス海岸」があるという空間構造を明確に示すことであると考えられる。具体的には、地図帳や教科書中の地図に、2つの地域名称を同時に掲載することなどが必要であろう。しばしば見られる「三陸海岸のうち南半部はリアス海岸である」という記載の仕方は、正しいが印象が弱く、確実な理解に結びつきにくい。筆者らは、「阿蘇カルデラ」、「秋吉カルスト」、「三陸リアス海岸」などの自然地理学の研究成果としての自然地域名称をもっと地理教育に導入すべきであると考えられる。つまり、代表的な自然地域について、固有名詞で明確にその地理的範囲と自然的特性を、文章でも地図上にも明記すべきである。

この考え方の根底には、戦後の社会科の地理的分野や地理では、人文地理領域に比較して自然地理領域は量的にも質的にも軽く扱われたことへの批判がある。このいわば自然地理領域の軽視は、1989(平成元)年に高等学校社会科が地歴科と公民科に分割された後の地理の指導要領でさらに進んでいる。

自然地理的事象についての断片的な記載のみになりがちで、しかもそれらを人文地理的事象の説明に援用することが、自然地理的事象の扱いの主眼となっている。しかも、人文地理的事象の説明にあたって、かつては自然地理的特性で説明できたが、現在ではそうではない、といった否定的ともいえる記述がなされる。例えば、「三陸のリアス海岸は天然の良港とされていたが、現在では砂浜の海岸にも大規模な掘込港がつくられるようになり、後背地の狭いリアス海岸の港は良港とはいえなくなった」などである。

しかし、その地形景観が観光地としてメリットをもつことや、その津波災害に関わるプレートテクトニクス(日本海溝との関係)やリアス海岸の湾の地形的特性のもつデメリットは、時代が変わっても存在し続ける。これらを理解するには、地理教育の中に自然そのものをより詳しく学習する機会をより一層設けなければならない。自然地理の事項を暗記し、これを人文地理現象を考察するときの道具として用いる学習からは、三陸リアス海岸の正確な地理的範囲も実際の防災知識も豊かな生涯学習の基礎素養も生まれない。

近年、環境教育の必要性が叫ばれているが、多くの環境問題の基盤にある自然の論理を重視し、これと人間あるいは社会事象との関わりを考察することが環境教育の重要な方法論である。そのためにも地理教育においては、自然地域名称を手がかりとして、その自然地理的性格

を的確に捉えた上に、その自然環境と密接に関わった現在の人文地理的事象や環境問題を理解する教育を行うべきであると考える。

### おわりに

地名「三陸」や「三陸海岸」は、今ではリアス海岸とほとんど切り離せないほど密接な関係をもつようになった。本来、行政地域名から由来した三陸という地域名が、明治三陸大津波という自然災害により、限定的にその地域の中のある特定の自然地理的性格（すなわち太平洋に面する岩石海岸）をもつ一部分に対して用いられるようになった（米地・今泉，1994，1995）。さらにその一部は、特有の地形景観であるリアス海岸と結び付いて、固有の地域名、つまり「三陸リアス海岸」が地名として用いられることが多くなったのである。

ところが、この名が美しい風景を有する海岸という印象を与えるために、三陸の岩石海岸一帯に拡大されがちになっている。地名は変化するものであり、その指し示す範囲が時代とともに変化することは当然で、三陸海岸の範囲が変わることは問題ではない。しかし、三陸リアス海岸という地形学的に明確な景観を示す術語を含むものが、その術語の定義に反するもの、つまりリアス景観ではないものも包括するようになることは間違いであろう。

第1報から本第3報まで、三陸地方から三陸海岸へ、さらに三陸リアス海岸へと、広いものから狭いものへ、古くから用いられたものから新しい呼称へと、取り上げてきた。しかし実際にはこれら3者とも現在使用され、しかもほぼ同じ地域を指すように理解されがちなのである。それは地名を固定的、画一的に捉えてきた従来の社会科教育にその一因がある。地名の示す地域の範囲が変わることのない自然地名「三陸リアス海岸」を認識することによって、逆に地域の範囲が可変的な地名「三陸地方」、「三陸海岸」の性格が明らかになるのである。

社会科は地名をより重視しなければならないと筆者らは考える。地名は単なる記号に過ぎないという見方もできよう。人名や年号と同じように、それは暗記の対象とされがちであった。しかし、不断に変化し生きている地名とともに、変化しにくい地名や変化させてはならない地名もあると考える。地名は識別のためのただの符丁ではない。人名や年号と地名とは基本的に異なるのである。人名は個人と一対一の対応をなし、年号はある特定の年を指し、ともに固定的であるのに対し、地名は社会や地域の変貌に伴って変化し、ときには国家、政府などの意図によって改変され、人々の地名から受けるイメージも地域の変貌とともに変化する。また、その地名の指す範囲もまた時代とともに変化する。他方、変化しにくい性格の地名もある。地名のそのような多様性を把握することを抜きにして社会科の学習に安易に地名を用いている現状を打破したいと考える。それが地域の時代の社会科を創る一つの道と思うからである。

本稿を草するにあたり、朝日新聞社飯島通明氏をはじめ、多くの方からのご教示をいただいた。記して謝意を表する。

## 注

- 1) 1868 (明治元) 年 12 月 7 日, それまでの「陸奥」国が, 磐城, 岩代, 陸前, 陸中, 陸奥の 5 カ国に, 「出羽」国が羽前, 羽後の 2 カ国に分割された。「三陸」は, このうち陸前, 陸中, 陸奥の「陸」のつく 3 カ国から名付けられた地名で, 明治初期には, 三陸巡察使や三陸会議, 三陸協定など, 明治新政府側が行政的に用いたものが多かった。しかし地元民にも積極的に「三陸」という地名を用いて地域の振興を図ろうという動きもあった。現久慈市宇部町出身の小田為綱による「三陸開拓上 (言) 書」(1872 (明治 5) 年 9 月脱稿, 1873 (明治 6) 年 8 月左院へ提出) には, 現岩手県南の西根野や六原野, 岩手山麓の茨島野をはじめ, 北は青森県東部の木崎野 (現三沢市付近) や八甲田山北麓の田代野など, 陸中や陸奥の 9 つの原野の開拓を提案している。このほかにも小田は, 三陸両羽大学校に関する計画書も作成している。
- 2) 1896 (明治 29) 年 6 月 15 日の明治三陸大津波は, 死者・行方不明者が, 岩手県で約 1 万 8 千人, 宮城・青森両県で約 4 千人, 計 2 万 2 千人の大惨事であった。当時の新聞, 時事新報には, 初め「東北の海嘯 (つなみ)」(同年 6 月 17 日付け) として報じられるが, 後に「今回の海嘯は, 三陸の沿岸を去る遠からざる海中において大地震ありしたため」, 「海嘯の区域は三陸の海岸もっともはなはだしく」, 「三陸地方大津波」, 「三陸沿岸地方の大津波」(同年 6 月 21 日付け), 「三陸被害地の海岸」(同年 7 月 19 日付け) などと, 三陸を冠して被害地域を示した。  
海嘯はポロロッカなどの名もあり, いわゆる大潮の満潮時に, 特定の河口や湾から遡上するものを指し, 津波とは異なるが, 明治三陸大津波当時は混同されていた。  
明治三陸大津波が当時「三陸の大海嘯」と間に「の」を入れて呼んでいたことは, 斎藤茂吉の随筆「三筋町界限」(1937) の「この追憶随筆は明治二十九年を起点とする四, 五年に当たるから, 日清戦役が済んで遼東還附に関する問題が囂しく, また, 東北三陸の大海嘯があり, 足尾銅山鉍毒事件があり」などの例からもわかる。
- 3) 岩手県が陸奥の一部 (二戸郡)・陸中の大部分 (現秋田県鹿角郡を除く)・陸前の一部 (気仙郡) からなるため, 「三陸」が岩手県の別称ないし雅称として用いられたのである。明治三陸大津波以後においても, 「三陸」という新聞が盛岡の三陸新聞社から刊行されていたことが, 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫に 1902 (明治 35) 年 11 月 8 日付けの同紙が所蔵されていることからわかる (同文庫, 1977)。また, この新聞の後身らしい「三陸新聞」は少なくとも 1901 (明治 34) 年から発行されていた (大槌町史下巻, 874 頁)。山形県を「両羽」と呼ぶ例も同様にある。羽前の全域と羽後の一部 (飽海郡) とからなる山形県をエリアとする「両羽日日新聞」は, 同じく 1901~1902 (明治 34~35) 年頃山形市の両羽日日新聞社から発行されていた。同名別紙の「両羽日日新聞」が 1883 (明治 16) 年頃酒田市のこれも同名の別社から発行されていた。両紙とも羽前と羽後にまたがる庄内地方をエリアとしていた。1894 (明治 27) 年 7 月 27 日付けの「大槌通信」(当時の一地方紙) には, 「村田保氏の水産談」と題する記事があり, 「曾て我三陸海岸地方に於ける水産實業者より招待せられたる日本水産会幹事長なる同氏にハ去る二月二十二日来槌・・・」とある。地元の人にも「三陸海岸地方」が自分たちの地方名と意識され始めたことを示す (大槌町史下巻, 907 頁)。
- 4) 厚生省国立公園選定委員であった地理学者辻村 (1958) は, 1947 (昭和 22) 年 8 月にこの海岸の視察を行い, 「陸中海岸巡航日誌」を書いている。その辻村 (1954) が意図的に「三陸」という地名を避けようとしていたことは, リアス海岸について「リアス海岸の入江にのぞむ土地

は、背景となる山地が交通を阻害する欠点を除けば、漁港として申し分ない地形を具え」と記し、リアス（湾）の例として、「陸前の沈降海岸に沢山ある小湾の中で、南端に近いのは雄勝の入江である」と挙げていることから窺える。そこでの他の海岸の地名の挙げ方は、「三浦半島の先端にある城ヶ島」や「新潟の付近では」などとあり、それらに比べて「陸前の」という古風な示し方は異様で、「三陸」という呼称を意図的に回避した苦心の表記としか思えない。「陸中海岸」の名が、いつ、だれによって用いられた始めたか不明であるが、その呼称の成立に辻村が関わっていた可能性は高い。

- 5) 仮称「三陸海岸国立公園」には松島湾一帯をも含めることが望ましい。近代的風景という視点で過小評価されがちな日本三景の一つ松島は、日本人の古来の伝統的な風景観に基づくもので、安芸の宮島を含む瀬戸内海国立公園と同様、やはり国立公園として相応しい。越前加賀海岸国立公園、若狭湾国立公園（この中に天橋立が含まれる）、山陰海岸国立公園も併せて、仮称「北陸山陰海岸国立公園」を目指すべきと考える。

## 文 献

- 阿部龍也 (1984) : 三陸の活路一格差是正を求めて一. 岩手日報社. 165p. 盛岡.
- Davis, W. M. (1915) : The principles of geographical description. *Ann. Assoc. Am. Geogr.*, 5, 61-105.
- Fairbridge, R. W. (1968a) : Fjärd. *Encyclopedia of Geomorphology*, p. 357.
- Fairbridge, R. W. (1968b) : Ria, rias coast and related forms. *ibid.*, 942-944.
- 星野通平 (1964) : 日本周辺のリアス海岸. 『日高教授記念号』. 479-485.
- 星野通平 (1986) : リアス海岸補遺. 『東海大学紀要海洋学部』. 22. 29-36.
- 井原儀編 (1901) : 『帝国物産地誌』 398p. 春陽堂.
- 今泉芳邦 (1984) : 漁村社会 (第二部近現代の漁業. 第1章明治時代の漁業 (1). 第2節). 『岩手県業業史』. 140-160. 岩手県.
- 今泉芳邦・米地文夫 (1994) : 地名の社会学的研究序説一社会科教育と関わって一. 『岩手大学教育学部研究年報』. 54-1. 45-54.
- 今泉芳邦・米地文夫・池田綾子 (1995) : 社会と自然の関係をどうとらえるか一三陸海岸の場合一. 『岩手県社会科教育研究』. 3輯. 21-28.
- 今泉芳邦 (1995) : 明治前期三陸漁村の諸形態一漁村類型化の一試論 (その1)一. 『岩手大学教育学部研究年報』. 54-2. 43-55.
- 今泉芳邦 (1996) : 明治前期三陸漁村の類型化一漁村類型化の一試論 (その2)一. 『岩手大学教育学部研究年報』. 56-1. 55-72.
- 岩手県 (1928) : 『岩手県案内』. 264p. 盛岡.
- 岩手県教育会 (1908) : 『巖手県誌』. 264. 盛岡.
- 神保小虎 (1896) : 『新編 地文教科書』. 金港堂.
- Johnson, D. W. (1919) : *Shore process and shoreline development*. pp. 584. Hofner. New York.
- 貝塚爽平 (1985) : 代表的なリアス海岸一三陸海岸一. 貝塚・成瀬・太田編. 『日本の海岸と平野』. 岩波書店. 97-109.
- 角田政治・矢津昌永・小平高明 (1911) : 『改訂 大日本地理集成 全』. 1034p. 隆文館.
- 川本忠平 (1960) : 岩手県の地理. 宮川ら編. 『郷土の地理 東北編 I』. 77-169. 宝文館.



- 古今書院編集部編 (1936) : 『地理学小辞典』. 379. 古今書院.
- Mensching, H. (1961) : “Die Rias Galicisch - Asturischen Küsten Spaniens Beobachtungen und Bemerkungen zu ihrer Entstehung”. *Erdkunde*, 15, 210-224.
- 三浦修 (1966) : 三陸海岸気仙沼付近の海岸段丘. 「東北地理」. 18. 116-122.
- 三浦修 (1968) : 海岸段丘からみた三陸リアス海岸の発達. 「地理学評論」. 41. 732-748.
- 武藤清一郎 (1985) : 三陸沿岸海域 II 物理. 日本海洋学会 沿岸海洋研究部会編 : 『日本沿岸海洋誌』. 220-231. 東海大学出版会.
- 大塚弥之助 (1931) : 日本島の沖積期初期の海岸線の変化とその沿海陸棚に発達する沈溺谷に関する時代的考察その他. 地理学評論. 7. 447-458.
- Richtshofen, F. v. (1886) : *Führer für Forschungsreisende*. pp. 734. Hannover.
- 斎藤茂吉 (1937) : 三筋町界限. 『斎藤茂吉随筆集』 (1986) 岩波文庫. 356p.
- 佐藤伝蔵 (1905) : 海岸線. 「地学雑誌」 14. (204). 889-894.
- 上海辞典出版社 (1983) : 『地理学詞典』. 804p. 上海.
- 志賀重昂 (1894) : 『日本風景論』. 220p. 政教社.
- 式正英 (1973) : フィヨルド. 『地理学事典』. 638-639. 二宮書店.
- 田山花袋 (1911) : 『新撰名勝地誌 東山道東北部』. 634p. 博文館.
- 辻村太郎 (1954) : 『地理学序説』. 265p. 有斐閣.
- 辻村太郎 (1958) : 『日本の山水』. 215p. 宝文館.
- 山口恵一郎 (1959) : 文化地域名称考 II. 「地理調査所時報」. 23. 44-47. 66.
- 横田幸八 (1950) : 『岩手県新誌』. 194p. 日本書院.
- 米地文夫 (1987) : 漁村の組分けのなぞ 海岸線のフラクタル構造との関係. 「数学セミナー」. 1987-9. 31-33.
- 米地文夫・遠藤匡俊 (1988) : 漁民の空間認識と海岸線のフラクタル構造との関係について—江戸時代の牡鹿半島の事例—. *Sci. Form.* 3. 143-153.
- 米地文夫・今泉芳邦 (1994) : 地名「三陸地方」の起源に関する地理学的ならびに社会学的問題—地名「三陸」の社会科教育論 (第1報)—. 「岩手大学教育学部研究年報」. 54-1. 129-142.
- 米地文夫・今泉芳邦 (1995) : 地名「三陸地方」の変遷に関する地理学的ならびに社会学的問題—地名「三陸」の社会科教育論 (第2報)—. 「岩手大学教育学部研究年報」. 54-2. 127-141.
- 米倉伸之 (1966) : 陸中北部沿岸地域の地形発達. 「地理学評論」. 39. 311-322.
- 吉川虎雄 (1964) : 日本のリアス海岸. 「第四紀研究」. 3. 290-296.
- 脇水鉄五郎 (1936) : 『日本風景誌』. 332p. 河出書房.

(なお、教科書、地図帳については省略した)